新しい文化政策プロジェクト 2023 年勉強会シリーズ

第 6 回　みんなで考える未来のかたち＠札幌
京都発 提言「社会の分子ではなく、分母としての文化政策」からの発想

＊共催　札幌演劇シーズン実行委員会

日時：2023 年 12 月 16 日（土）13：30〜16：30
会場：札幌市民活動プラザ星園 2 階大会議室および Zoom
ゲスト：草野竹史氏（NPO 法人 ezorock 代表理事、NPO 法人北海道 NPO サポートセンター理事）
司会：三上敦氏（札幌演劇シーズン実行委員会）
参加者：朝倉由希、大島光春、蔭山陽太、佐野真由子、鈴木佳子、山田奨治、山本麻友美（プロジェクトメンバー）
一般参加者 31 名
オソリナ・ダリア（記録担当＝佐野研究室大学院生）

今回は初の札幌開催となった。当日は冒頭、**共催の札幌演劇シーズン実行委員会から司会を務められた三上敦氏**が挨拶され、**佐野真由子プロジェクト代表**が、共催者への御礼に続き、提言「社会の分子ではなく、分母としての文化政策」を紹介した。

佐野は、提言の概要に加え、提言の根底にある問題意識として、現代日本社会における、①文化政策をめぐる議論の矮小化[1]、②大きな理念から考える機会の欠如、③西洋を範とする「考え方の（歴史的な）癖」という 3 つのポイントを説明した。また、あえて理念レベルにとどめた提言の次のステップとして具体的なアクション・プランを期待されることもあるが、全国に共通して当てはまるプランなどというものは存在しえない――この提言を議論の種として、実践の仕方を自ら考え、それぞれの地域にあった形で活用していただくことこそ提言の本旨であると述べた。

それを受け、「北海道からの提言への応答」という形で**ゲストの草野竹史氏による発話**が行われた。概要は次のとおり。

提言が謳う広義の文化に対し、私自身は文化を狭い意味で捉えているように思っていたが、振り返ってみると、「文化」という言葉を最初に聞いたのは、母親が「うちは金がないから、『健康で文化的な最低限度の生活』を目指す」と言ったときだった。そして現在、私は若い人たちが数百人入っている ezorock という団体を組織しており、それぞれの生き様を大切に、ありのままに生きていけるようなコミュニティを目指しているので、提言の「生き方の選択肢が多い社会」という部分にはグッときた。三上さんから今日の勉強会に招かれたとき、最初は面食らったが、このような角度から考えると、自分の基本的なスタンスはこの提言と重なっていると思うようになった。また、「NPO」とか「ボランティア」とかという言葉にずっと違和感を覚えていた。何

[1] 2017 年の文化芸術基本法における、まちづくりも教育も福祉も国際交流も産業も含まないものとしての文化の捉え方は、その一例である。

もかもを海外に見習うことに抵抗感を持っているので、「西洋を範とする考え方の癖」という話も印象的だった。

そのほか、提言の柱の一つである「時間をかけて価値を評価していく社会」にはとくに感じるところがあった。議論の中で「わかりやすく端的に言おう」とか「キャッチな言葉を使おう」とかいう提案が現れるとき、その裏側で抜け落ちてしまう奥深さがあり、背景の理解が薄れていき、議論が単調になっていくという懸念を持っている。これに対し、ezorock は、このままでいいのかという深い問いかけが起きやすい組織である。

「分野の壁をゆさぶり続けること」の柱に関しては、私がここに来ていること自体がこの提案への答えだと思う。私はもともと環境問題に取り組む人間で、20 代は「ゴミの草野」と言われていた。30 代になると、若者の社会参加や地域づくりのファシリテーターをすることでもっと横断的な手法に移行し、一つの分野に囚われずに何かを一緒にやろうとすることの重要性を実感している。

ezorock は社会教育の団体である。社会教育とは公民館の機能に行きつく。実はこの提言の考え方は社会教育に非常に近いと思っている。ezorock は、札幌市で行われたロックフェスティバル会場がゴミだらけになっているという問題に若者が取り組んだことから始まり、後にフェスのゴミ問題から環境問題全般及び若者の社会参加と地域づくりに行動範囲が広がった。方法論として、社会課題の現場に若者を送り込み、若者がそこで葛藤して、人生を変える機会を作り出していくということをやっている。

最近気になっているデータに、“World Giving Index 2023”で「人助けランキングで日本はアジア最下位」になったというのがあるが、私はそれを疑問に思う。実際、上記の報告書の中で、「アメリカでは慈善行為として認識されていることが、日本では責任として理解されている可能性が高い」とあり、わざわざ「人助け」と思う前に、日本では当たり前の責任として捉えられている行為（たとえばゴミ拾い）を見直し、お互いをもっと褒めあってもいいのではないか。他に、全国津々浦々で毎日行われているラジオ体操という取り組みもこの社会を考えるうえで興味深い。

未来に向けてどんな社会にしていきたいかというと、日々一生懸命生きて、みんなで飯を食って、年に 3 日くらい野外で爆音がゆるされる暮らしがちょうどいいと思う。こんなことを考えていたら、公民館や社会教育に行きついた。

続いて、草野氏の発話に当プロジェクトメンバーが応じた。メンバーの発言概要は次のとおり。

蔭山陽太：非常に刺激的なお話だった。なお、最近の経験から、提言で謳った「西洋を範としない」という趣旨について、ナショナリスト的な発言として誤解されることがあった。私たちが打ち出したのはそういうことではないことをこの機会に付言しておきたい。

山本麻友美：提言を発して 1 年近くがたち、言わんとしたことが自ら腑に落ちて、自分なりの説明ができるようになってきた。そうしたなか、提言を作っていた時に当たり前だと思っていた前提が伝わらないということも多々あり、いまのお話にもあったが、「当たり前」のことをもう一度言語化し、話し合うことの重要さを感じている。

大島光春：草野さんのお話の、行動する人を集めること、ボランティアについての違和感など、腑に落ちるところがたくさんあった。私は博物館に勤めており、実のところそこではボランティアの役割が大きく、非常にありがたいと思っている。

鈴木佳子：私はさまざまな活動の一環として、全国を巡回する猿まわしのプロモーターを引き受けている。東北地方に山口から猿まわしの一行がやってきて、泊まる場所もなければ、資金を集める方法もなかったが、ある村のお寺が寝床を提供し、地域住民も集まって食べ物を持ち寄ってくれたということがあった。一回途絶えた猿まわしを復活しようとした知り合いの民俗学者がめざしたのは、地域に入って芸能を届けることで、その地域もまた外のものを受け入れる機会を得るという循環を復活することだった。草野さんが話された、社会課題がある場所に若者を連れていき、投入していくという手法もそれに重なっているようで、共感した。

朝倉由希：社会現場から課題を見つけ出し、分野や縦割りと関係なく広く考えるという草野さんのアプローチに感心した。また、私もボランティアという単語に対して少し違和感がある。私の住んでいる地域では、（ボランティアとして）「自発的に」何かをやるよりは、「当たり前の義務」としてやらなければいけないことの方が多いと感じている。

山田奨治：成長ばかり目指すのではなく、その地域に最適であるものを見極めていく「ちょうどいい社会」という考え方が最も胸に響いた。社会教育という視点は、この提言を作る時に入っていなかったが、これからの課題として、為政者だけでなく市民に対しても新しい文化政策という考え方を広めることが大事だと思った。また、最近では自分の地域で自発的な住民活動を起こせないかと考えている。周りにいるのは高齢者が多く、新しいアイディアに敏感に反応しうる若者がいないが、どうしたら若者を参加させられるか、色々と考えさせられた。

全体討論

休憩後、全体討論が繰り広げられた。以下に概要を記す。

議論は参加者の発言をきっかけに、過去との繋がりに関する話題から始まった。地域の過去を知ること、ものを長い尺でみることの重要性が指摘され、北海道現地の例が挙げられた。

- 軍隊の問題を研究している者として、北海道では自分たちの歴史の中で見たいところだけを見て、そうでないところを無視する傾向があると感じている。現代と過去との繋がりをどう扱ったらいいか？過去に拘りすぎるのも問題だと思うが……。
- 北海道では最近増えている鹿を有効活用しようという話が出ているが、その背景には実は、蝦夷を開拓するために、現地の狼を絶滅させたという過去の原因がある。そういう過去を知らないと、議論が変な方向に行ってしまう可能性がある。
- 提言では柱 4 の「時間を掛けて価値を判断する」というところが関連してくる。自分の人生を長い尺の上に置いてみることが必要であるという議論をしてきた。昨今の、結果を評価する視野は短すぎ、歴史の上で自分の人生を相対化する能力に欠けている。
- 栗山町の開拓の歴史をまとめて、現地で上映会をするという取り組みに関わったが、栗山町に長年住んでいる 80 歳の方からいただいた「こんな歴史があるとは知らなかった」というコメントが印象的だった。一方、映画製作の中で、女性の役割をもっと現代の理想に寄り添う形で見せようということもあり、歴史の解釈が変わってきていることも感じた。

その後、議論はボランティアという概念と地域活動というテーマをめぐって展開された。地域活動の発端、そうした活動への憧れ、過去の物語とその評価の仕方という話題が出た。

- 京都市二寧坂のまちづくりも ezorock と同様、ゴミから始まった。やはりきっかけになるのは現場の問題である。まちづくりにかかわっている自分自身、ボランティアと呼ばれることがあり、お金を貰っているか否かということで本職かボランティアかが区別されていることに違和感を覚えるが、言葉に拘らず、そういう生き方に憧れる若者を増やすのが大事な課題だと思う。また、若者だけでなく、年配の方も意味を見つけて、両方が一緒になって何かをやろうとすることに突破口があるかもしれない。
- ボランティアを長くやっている人は、そこに生き様が見え隠れしている。それに気付いて、憧れるようになる若者が出てくるのは面白い。
- 今だけでなく、過去の人の物語にも、憧れる機会、価値を見出す機会がある。
- 昨今、大谷翔平という野球選手の話題が出るとき、「同じ時代に生きていてよかった」とか、「100 年後の人も彼に憧れるだろう」とかというフレーズをよく耳にする。ここからは人々が自分の人生を自ずと歴史化する過程が見える。
- 人間の価値を経済と関連づけるのは、現代社会における語り方の癖だが、100 年後に残るのは、経済的な話ではなく、やはりその人の人間としての価値だと思う。
- 「新しい民話」というプロジェクトをやっているが、商店街の人々のインタビューから始まり、それらの個人史を現代の民話として残すという考えに至った。史実よりは、語られて伝わる価値の方を重視したい。自分はお金をもらっているわけではないが、それをボランティアと呼ぶよりは、「そういう活動をやっている」と言いたい。また、自分の職場で「人としてどんな姿になりたいか」について話し合ったことがあり、もっとお互いを褒め合い、認め合う形がいいという話が出た。

こうして議論が進む中で、北海道文化振興条例が話題に上り、そこから北海道特有の文化認識に対する意見が交わされた。

- 北海道文化振興条例(1994 年)は、市民の文化権を定めた最初の法律であり、第二章では（文化以外の）施策に文化の視点を取り入れるよう努めるという項目がある。29 年前にこれがあったから、いま北海道が打ち出すあらゆる施策に文化の視点が入っていると言えるだろうか？
- 提言が謳っている広義の文化が 30 年前の時点ですでに入っていたとすれば、現状がどうなっているのか興味深い。
- 北海道文化振興条例は狭義の文化のことを語っているように見えるが、同時にアイヌの文化など、もっと広い意味での文化を視野に入れているかもしれない。
- 例えば、えりも砂漠の復興においてはアイヌ文化は実際にとても重要な位置にあるが、それを映画化しようとすると、アイヌ文化を腫れ物に触れるように扱う北海道の風潮のために多々の困難がある。

- えりも町の映画制作は、観光を盛り上げるためでもある。同町の文化政策はもともと弱かった。
- 北海道民は「文化意識が低い」「目を覚ませ」などと言われる。それは文化を生活と切り離されたものとして認識していることでもあるだろう。
- その認識には時代差もあると思うが、高校生はどんな捉え方だろうか？　→提言に関して驚きはあまりなかった。ただ、それは世代に関係ないと思う。他の高校生を見ていると、「文化」に関する意識は低いと感じる。また、提言の「選択肢の多い社会」というところで言えば、大学進学が今でも当たり前の常識である。提言が文化という言葉を再定義しようとしているところに共感できる。
- 京都の大学生はどうだろうか？　→北海道出身で京都で学生生活を送っているが、京都に比べて北海道は「文化」の認識が低いと感じる。
- 北海道では京都のように、先祖の歴史に関連づけながら北海道のさまざまな場所について話せる人は少ない。石碑など、歴史を伝えられるものはこのごろやっと増えてきたとも思う。
- 北海道は、戊辰戦争のことが今でも話に出るくらい、その歴史が生々しく残っている地域である。
- 栗山町では子供が祭りで傘踊りをするが、その伝統の起源を地元民は誰もわからない。文化として受け継がれるというよりは、面白いからやってみよう感覚でやっているイメージがある。
- それは北海道ではよくある話で、そんなに違和感もない。

議論が白熱する中、参加者がそれぞれ言い残したことについて発言し、今回の勉強会は収束した。

- 肝心なことは、思い出だと思う。文化に対する意識が低いのも、思い出がないからだと思う。人の思い出や愛着は文化政策の根拠であると思う。
- 資格を取ったから、もうその現場・専門に進むしかないという固定概念が未だにあるので、提言の「生き方の選択肢が多い社会」という部分が響いた。また、学校でボランティアを「強制的に」させられることがあったが、やはり自主的な行為であるべきだと思う。
- 北海道の文化認識といえば、芸術という狭義の文化の認識は確かに低いが、提言が言っているような生活に根ざした四季を感じられる文化はたくさんある。ただ、その価値を子供たちに伝え切れていない。
- 今、ちょうど縦割りを打破した政策を模索している。提言の「分野の壁を揺さぶり続ける」ところで思うのは、やはり文化は分野の壁を打破する切り口になり得ることである。
- 文化的には、北海道が成り立ったのは明治維新前後からであって、150 年にすぎない。
- 提言が批判している、なんでも西洋と比較する傾向に対して、北海道では「内地は何でもあるから良いな」という内地との比較が多い。
- 同じ札幌市でも、それぞれの町で芸術の性格が違い、同じ基準で図るのはだめだ。しかし、ある部署でその話をしたら、「ここはそういう話をする場所ではない」と言われた。このような場合に、提言にある文化担当官が活躍してくれれば良いと思った。

- 国際的には、文化政策に芸術文化振興、文化財保護、教育、対外文化政策、創造経済という５つの領域を含まれる場合が多いと聞いたことがある。ところが日本の場合は芸術文化に限られてしまい、社会全体をどう変えていくのかというところまでは至らない。その範囲をもっと広げれば、地域の政策づくりが文化の問題になってくる。
- 政治の立場からすると、柱４の「時間を掛けて価値を評価する」を実現していきたいと思うが、現実には目先の利益・成果が求められる場合が多く、難しさを感じる。文化政策が幅広い領域の基盤になるという視点は重要だと思う。
- 普段気づいていないが、北海道の雪で止まった車を通行人がさりげなく押してくれるという素敵な助け合いの習慣こそ文化ではないか。もっといろんなところでこうしたことに気づくようにしたい。また、広義の文化政策という観点で考えてみると、行政だけでなく民間でもやるべきことだろう。
- 提言に全面的に同意するが、行政の場でその考え方をどう取り入れるべきかは課題である。行政というのは組織ではなく、システムであるから、こういう考え方をそのシステムに取り込んでいければよい。
- 単一の縦の路線ではなく、個人のいろいろな選択肢が横に並んで広がっているような社会を実現できればいいと思った。
- 私は経済人だが、提言の７つのドクトリンには大きな意味があると思う。日本では今まで広い意味で、長期的に考える視点がなかったから。
- 文化の意識が高い・低いというところに、私たちの考え方の癖、ネガティブなバイアスがあると思う。
- 文化をその場所の歴史の古さで測るのは間違っていると思う。また、北海道は広く、人はそこに薄く住んでいる。そういうところで人はどのように集まるのかということを追求してみたら面白いのではないか。
- 自分はいま、文化を眠らせてあげる、取り置いておくことさえできない、という場面におり、あるものを残すべきか残さないべきかという線引きをしなければならないことに直面している。その価値判断を、私たちは本当にしていいのかと考えている。
- 北海道は、一世帯あたりの人数が少ない地域であり、日々の暮らしが大変で市民活動に時間を割けない人が多いため、地域活動はそもそも生み出しにくい。また、広くて寒い地域という特徴も文化に影響を与えている。提言に対しては、「文化政策」という言葉から遠い人にも糸口を与えるような魅力的な「問い」を立て、冒頭に付すとよいのではないかと思った。
- 日本語に「分を弁える」という表現がある。専門的・職業的な「分」を弁えて、そこから出ないというマナーが、提言でも言っている分断の弊害など、今日の問題の底にあるように感じている。この慣習を打ち破り、良い意味で分を弁えない社会になればよいと思う。

参加学生所感

今回の議論では様々な論点およびキーワードが出されたが、最も私の心に残ったのは北海道における「文化意識」をめぐる議論である。このテーマをめぐって、歴史への関心、アイヌ文化に

対する視線、世代間でのギャップ、そして北海道文化振興条例といった極めて具体的なものから比較的抽象的なものまで言及され、まさに「北海道ならでは」の議論が展開されたと思う。また、今日でも日常生活のなかで戊辰戦争が話題にのぼることがあるという興味深い意見が出されたが、北海道で暮らす人々が「近代」や「明治」について如何なる認識を持っているのか、ぜひ前回の佐賀県の事例などと比較したいと思った。

ところで、議論の中では「内地との比較」という話題も出た。北海道には札幌を中心に各種教育機関や企業が立ち並び、また広大な農場や観光施設などもあり、北海道ならではの様々な生き方の選択肢がある。そのような選択肢を求めて内地からの移住を希望する人も少なくない[2]。しかし、勉強会参加者によれば、道内では「内地は何でもあるから良いな」という声が少なくないという。北海道独自の選択肢の存在を活かしつつ「内地との比較」で道民の間に生じる不満を如何に減らしていけるかということが、北海道の内・外どちらで生きる人々にとっても「生き方の選択肢が多い社会」を実現させるうえで重要な課題ではないだろうか。

佐藤岳流（京都大学大学院教育学研究科修士 2 回生）

北海道の文化政策の特徴について色々学ばせていただき、貴重な時間を過ごさせていただいた。

ボランティアなどの外国語からの借用語に関するディスカションは、ロシアのナショナリスト界隈の議論に非常に似ていると感じた。このような「形」を気にすることもある意味で有意義ではあるが、このような議論は、「我が国だけが優秀であり、我々に当てはまる概念は他所とは違う」というような考え方に繋がり、国際的な対話の可能性自体が絶たれてしまうことが多いように感じる。周りと違うところばかりに注目すると、共有している人道的な価値に目がいかないし、共有できる価値がないと、対話はそもそも成り立たないからである。

日本人は「ボランティア」としてではなく、やりたいからやっているのだという話が出たが、それはどこの国の人も同じである。「海外」と日本で呼ばれる所の人たちも、褒められるために無料で善行を行っていることを見せびらかしているのではなく、それが自分たちにとって重要な事業であり、人を助けたいから努力し、やりたいからそれをやっているだけである。それは日本人特有の価値観ではないし、ボランティアという言葉に含まれない概念でもない。言葉の由来に拘り、隔たりを作ることよりは、このような普遍的な価値に時々気づいてみるのも良いのではないかと思った。

オソリナ・ダリア（京都大学大学院教育学研究科修士 1 回生）

[2] たとえば、 北海道が東京都 23 区の在住ないし勤務者のうち北海道への移住・就業希望者を対象に募集した「移住支援金」は、応募者多数のため 2023 年 9 月 19 日時点で受付が停止されている（「移住支援金特設ページ（移住者向け）北海道【UIJ ターン新規就業支援事業】」北海道ホームページ（https://www.pref.hokkaido.lg.jp/kz/jzi/ui-turn/H31wakuwaku-iju-page.html）2024 年 1 月 19 日閲覧）。